

消えゆく

職人

コア職人 中村庸一さん (三谷)

コア。粉（ソギ）とも呼ばれる

屋根瓦の下に敷き、家内の湿気を吸い

屋根を守る薄い木の板

木材は檜ひのきや栗などが使われ

その厚さは6厘5毛

約1・97ミリという薄さ

最盛期は泊り込みで作っても

追いつかないほどの注文もあった

ひと昔までは多くの家に使われていたが

今ではコアを使う人はほとんどいない

数多くいたコア職人は姿を消し

県内では一人になった中村庸一さん (三谷)

その中村さんも

時代の流れ、しかたがない。と言う

昔からの技法を守り続ける職人魂

時代とともに消えゆく職人たち。

コア職人を紹介します。

コアを作り続けて32年
県内で一人になった職人

日野町高尾にある作業小屋では、裸電球の明かりの下で黙々とコアを作り続ける職人、中村庸一さん（77歳）、皓子さん（74歳）夫婦（三谷）の姿があります。

コアは、屋根瓦の下に敷く薄い木の板。関西では「粉」とも呼ばれ、家内の湿気を吸収しながら屋根を守ります。コアを敷くと「屋根は100年持つ」と言われ、旧家によく使われています。

材料には、檜や栗を使い、厚さは何と6厘5毛。約1・97という薄さは、庸一さんがたどり着いた答えで、これ以上薄くても厚くてもよくないといえます。長さ約30、幅15、11と使う場所により違ってきます。60枚で1把、4把で1束。4束で屋根1坪分を敷くことができます。

庸一さんが作るコアは、均一な厚さでていねいな作り。こだわりの職人魂が評判を呼び、多くの屋根職人たちから注文を受けました。泊り込みで作業しても追い

つげず、家族のほか近所の人にも手伝ってもらったこともありました。

しかし、時代は変わり、住宅の構造変化や増える外材などの事情により、コアを敷く家屋が減少。昔は県内でも多くの職人がいましたが、高齢化や採算が合わなくなつたため職人は姿を消し、今では県内でも庸一さんだけになりました。

最盛期は1日に2400枚（10束）も作っていました。が、今では3分の1程度に。一度に大量の枚数を作ることはできないので、急な注文にも答えられるようにと、作り置きしておくほどになってしまいました。

庸一さんは46歳の時に、勤めていた建設業社から転職。15歳から製材所に勤めていた経験があつたことから自信があり、この道を選びました。作り始めるころは、安来の職人に「こんなもんはコアじゃない」と言われ、ショックを受けた。

その後、木を削る刃の角度など技を見て覚え、他の職人のコアと見比べながら品質向上を目指したり、生産速度を上げるため、機械（コア落し）の回転数を上げるなどの工夫もしました。今では、手に伝わる振動や微妙な体重のかけかたで削る厚さが分かるほど。長年の経験が体に染みついて

います。庸一さんは、コア作り32年間を振り返り「苦勞ばかりで何も残っていないが、いい人たちに恵まれたことが財産になった」と言い、作業を手伝う妻の皓子さんは「機械を維持する経費を考えると厳しく、いつも辞めようかと思う」と厳しい現実を目を向けます。

それでも庸一さんは「職人がいなくなりさびしいが、体が続く限り続けたい。作業小屋に行くとき気がいい。それに、小屋に来るお客さんとの話も楽しみ」と目を輝かせていました。

写真左 庸一さんが作る檜のコア。厚さは1.95ミリと薄いですが、腰があるのが特徴